



▲馬蹄形をした5階建ての住棟に囲まれた広い芝生の中庭



▶竣工当時(1930年ごろ)の団地の空撮写真。馬蹄形の住棟が団地の中心となっていることが分かる

住棟はレジナ造で半地下に倉庫、その上に三層の住戸、そして最上階の五階には、以前は乾燥室だった倉庫がある。間取りは基本的に $3\frac{1}{2}$ Kタイプで、部屋の形や大きさは少しずつ異なり、家族のライフスタイルの変化により部屋の使い分けができるようになっていて、室内面積も六〇m²ほどで意外に小さく質素で、日本の古い団地とさほど変わらない。

アラカルト

この団地が建築されたのは第一次大戦後の深刻な住宅不足のころ。十九世紀ドイツの厳格な家賃規制や都市計画の中、敗戦後の社会主義やユートピア的考え方から、新しい街や住宅を夢見て実現した。企画者と設計者が、住民による協同組合が中心となり、議論しながら「総合的な都市の単位」として建設され

生んだ団地

大切に維持管理し住み続けた。ブリツツジードレンゲのような集合住宅のある都市に住むには、やはり主体性のはつきりした非常利協同組合の存在と、その中で議論を多く重ね、共同作業をしていくことが今こそ必要ではないだろうか。

誇り持てる建物

沖縄に住むわたしは、ちは、数百年もの歴史をもつて、いた街や建築を戦争ですべて失った。だから今、沖縄の街や建築の歴史は戦後の五十七年分しか見えない。残念ながら日本のどの地域よりも短い。

は街そのものが博物館のようで、古い集合住宅も多く、中には数百年の歴史をもつ建物もある。また、外観は古びていても、内部はすごくモダンに改装して住んでいる。人々は、古い建物に住むことに誇りをもっている。

ドイツ・ベルリンの郊外、中心市街地から地下鉄で三十五分のと

これは七十五年程前に建築家ブルーノ・タウトが設計した「ブリツツ・ジードルング」という約千二百戸の集合住宅団地である。敷地中央には馬蹄（ばてい）形をした住棟があり、それに囲まれた幅

約三百三十ヘクタールの広い中庭がある。樹木も少なく遊具もない、人が集まる広場でもないが、この団地や住民のハートを感じさせる大切な空間である。ここを訪れると、だれもが自分の懐かしい故郷に帰ってきたかのように感じる。そして、草花で美しく飾られたバルコニーからは、友人や隣人のように住民が手振り出迎えてくれる。

は珍しい「テラコッタ」屋根にモルタル塗りの外壁で美しくカラーリングされている。立面にはリズムや個性があふれ、各戸の扉や窓も一つ一つデザインされ、美しい彩色からは住み手のプライドが感じられる。中庭に面するバルコニーはいつも草花が飾られており、建物も中庭も手入れが行き届き、まったく古さを感じさせない。このジー・ドルングは今も人気があり、入居希望者が絶えないそうである。

A photograph of a house entrance. The main entrance consists of two red doors with glass panels. Above the doors is a small porch area with a white railing. To the right of the entrance is a white wall with a small sign or plaque. The overall appearance is that of a simple, well-maintained residential building.



▲各住戸のバルコニーはタイルで縁取りされ、壁はブルーにペイントされている。そして、いつもそこには美しい草花が飾られている



◆ドアや窓は木製で、さまざまな色で彩られている。これまで、大切に維持管理されてきたことをうかがわせる

36

福村俊治